

頭陀寺城(市場城, 松下屋敷, 松下嘉平次屋敷, 田中屋敷) (指定無)

(浜松市南区頭陀寺町) (頭陀寺門前, 頭陀寺町第一公園)

頭陀寺城(ずだじじょう)は、現在の静岡県浜松市南区頭陀寺町にある高野山真言宗の古刹・青林山頭陀寺(づだぢ)の門前にあった戦国時代の日本の城。

概要

地元の伝承では別名市場城とも云う。引間城主・飯尾氏を寄親とする寄子の土豪・近江源氏の松下氏の居城で、松下氏は頭陀寺の寺侍であった可能性が強い。川匂庄(かわわのしょう)の領家は頭陀寺であった。天文20年(1551年)頃から約3年間、まだ無名の豊臣秀吉が松下之綱(松下加兵衛)に仕えたと『太閤素生記』に記されている。

永禄6年(1563年)遠州怨劇(今川氏と飯尾氏の争乱)で焼き討ちに遭い、炎上する。

江戸時代は、松下之綱の長男暁綱の家系が、松下屋敷の当主となって明治38年(1905年)まで居住した。

遺構

遺構は1945年、アメリカ軍による空襲と艦砲射撃で、頭陀寺の本堂(法堂)、仏殿、三重塔、行者堂、庫裏、御影堂、仁王門などとともに壊滅した。

広さは約1町(109m)四方で、ほぼ土豪の一般的な大きさで、頭陀寺自体を含めると、広さについては、もっと大きかったのかもしれない。かつて、城の周囲は田となっており、戦国時代の頭陀寺城は、通称「松下屋敷跡」(別名:田中屋敷)といわれる場所の地下80cmにあることが、平成13年(2001年)10月の発掘調査でほぼ明らかになっている。また、焼き討ちにあったことを裏付ける炭跡も確認されている。

井戸跡からは大きな硯石や高級青磁の破片が発見されており、松下氏は交易商人でもあった可能性がある。頭陀寺町第一公園の、わずかに土塁の面影を残すところにある「松下屋敷跡石碑」は、松下氏の屋敷神を祀る、「松下稻荷」の本殿のあった場所で、かつては応神天皇と敦実親王を祀っていた所である。松下稻荷は頭陀寺の境内に移転した。

Wikipediaによる

頭陀寺は、飛鳥時代に建立された古寺で、戦国時代は、今川氏の保護を受けて繁栄しました。

門前には、寺侍だったと思われる松下氏の屋敷があり、一帯は、頭陀寺城とも呼ばれていました。この屋敷には、少年時代の豊巨秀吉がしばらく奉公していたという記録が残っています。

松下氏は、直虎が女城主となって、幼少期を支えてきていた井伊家の跡取り虎松(後の井伊直政)とも深い関わりがあります。

直虎が城主となった直後、今川氏は徳政令を出します。直虎はこれを一時凍結しますが、結局、発動せざるをえなくなり、虎松の父直親が今川氏に謀殺されることに加担した井伊家の家臣、小野和泉守に井伊谷城をのっとりされてしまいました。

直虎や直虎の母、虎松の実母は、龍潭寺の松岳院に隠れ暮らし、今川氏に命を狙われた8歳の虎松は、三河(愛知県)の鳳来寺に逃げました。しばらく後、虎松の実母が再婚したのが、頭陀寺城の松下源太郎でした。

小野氏が井伊領を奪った直後に徳川家康が遠江に侵攻し、井伊谷城を摂取。小野和泉守は家康により磔に処されました。その後、井伊谷は武田信玄の軍に占領されますが、信玄が病死すると武田氏は衰退しました。

そうした情勢下にあった1574年、父直親の13回忌が龍潭寺で行われ、虎松も鳳来寺からやってきました。このとき、直虎や南溪和尚らは、虎松を浜松城の家康に出仕させることを決め、母の再婚相手、松下源太郎に養子として預けます。

1575年、松下氏のはからいもあって、凛々しい松下虎松は家康に謁見。小姓にとりたてられ、華々しい活躍を始めたのです。

松下氏がいなければ、徳川四天王、井伊直政は生まれなかったかもしれません。

「浜松・浜名湖ツーリズムビューロー」による



松下嘉平次屋敷跡碑



頭陀寺左から秀吉、家康、直政の像

